論稿 | Article

2011年アルゼンチン大統領選挙
—第2次クリスティーナ政権へ—

篠﨑　英樹

はじめに

2011年10月23日，大統領選挙が実施され，現職のクリスティーナ・キルチネル（Cristina Fernández de Kirchner，以下，クリスティーナと称する）候補が圧勝し，再選された。この勝利は，経済危機に端を発した2001年の国家危機後に行われた3度の大統領選挙において，キルチネル派がすべて勝利したことを意味した。

2003年大統領選挙ではクリスティーナ大統領の夫であるネストル・キルチネル（Néstor Kirchner）が，当時のドゥアルデ（Eduardo Duhalde）ペロニスタ党（Partido Peronista。正式名は正義党：Partido Justicialista）[1]政権の全面的支援のもと，勝利した。しかしながら，キルチネルは，大統領就任直後から，独自の政治基盤の構築に尽力し，最大野党急進党（Unión Cíviva Radical）の一部等を取りこみ政党横断型政治勢力「コンセルタシオン（Concertación）」を結成した[2]。それをもとに2007年大統領選挙では，キルチネル大統領夫人でブエノスアイレス州選出上院議員であったクリスティーナが出馬し，対抗勢力の分裂により利するところがあったが，圧勝した。この勝利をもってキルチネル派の政治基盤は盤石なものになったと思われた。

しかしながら，クリスティーナ政権の船出は必ずしも順風満帆とはならなかった。就任直後の2008年には，輸出税制改革をめぐって，コンセルタシオン内の急進党グループのコボス（Julio Cobos）副大統領と袂を分かち，キルチネル派の政治基盤は事実上崩壊した。2009年中間選挙では，政権の弱体化に経済情勢の悪化懸念も相まって，クリスティーナ大統領の支持率は低下し，上下両院ともに過半数を割り敗北したのであった。

それでは，そうした厳しい状況の中，なぜクリスティーナ大統領は，今回の選挙で圧勝できたのか。それも，キルチネル派を象徴する政党横断型政治勢力コンセルタシオンが瓦解し，困難な状況が容易に想像できる中，2007年大統領選挙以上の勝利を収めたのはなぜか。

本稿では，まず2009年中間選挙以降のクリスティーナ政権の政策を概観する。次に，今回初めて導入された，大統領選挙および連邦議会議員選挙の候補者を選出する予備選挙（PASO: las Elecciones Primarias, Abiertas, Simultáneas y Obligatorias, 後述）を説明した後，大統領選挙の結果を分析する。その後，第2次クリスティーナ政権の特徴をまとめ，今後の展望を簡単に触れてみたい。

I　大統領選挙に向けた動向

2009年中間選挙で敗北したクリスティーナ政権は，否応なく従来の対立路線から対話路線へと

転換を強いられた。上下両院で過半数を失ったことから，野党勢力の指導者との会談を進め，円滑な議会運営を図ったが，話がまとまるどころか逆に軋轢を生む結果となった。例えば，2010年10月に可決された年金増額法案に対して，政府の立場は，年金支給額の増額は財政が逼迫した状態では困難であるとして否定的であった。10月13日に行われた上院での採決では，賛成票と反対票が同数となり，上院議長であるコボス副大統領の判断に法案の行方は委ねられた。その結果として，2008年7月の輸出税制改革法案の時のようにコボス副大統領は政府の意向と異なる賛成票を投じ，法案は可決された。当然のことながら，コボスの行動に対し，クリスティーナ大統領は痛烈な批判を行った。また，2011年度予算案に関しては，結局期限内に議会での採決に至らず，2010年度予算を適用する大統領令を発令するに至っている。

他方，政治基盤に関しては，コボス副大統領は辞任せず，2011年までの任期を全うしたものの，政党横断型政治勢力コンセルタシオンが形骸化したことで，キルチネル派は新しい基盤の構築が求められた。キルチネル前大統領とクリスティーナ大統領の所属政党であるペロニスタ党において，党首を務めるキルチネルは，先頭にたって党内改革を実行するはずであった。しかし，党内改革，さらに言えば，クリスティーナ大統領の支持率低迷を受けて，自らが2011年大統領選挙に出馬するというキルチネルの戦略は，同年10月27日に本人の逝去により，頓挫することとなった。

以下，クリスティーナ政権のメディアと労働組合に対する取り組みをみた後，選挙に向けた政治勢力の動向，今回初めて導入された予備選挙と，大統領選挙に向けた流れを概観したい。

1　政府批判メディア対策

政府に批判的なメディアに対するキルチネル政権からの強硬路線は，継続された。例えば，そのようなメディアもしくは報道関係者に対して，名指しで批判するだけでなく，大統領の外遊時に大統領専用機に同乗させない，大統領府をはじめ政府関係機関への立ち入りを禁止する，さらには意図的に情報を流さないといった対応を取った。

2009年10月に法制化された改正メディア法は，政権に批判的で最大の発行部数をほこるクラリン紙を中心にテレビ・ラジオからなるクラリン・グループを標的としたと言われた。実際，政府は，クラリン・グループが契約した国内サッカー1部リーグの独占放送権を一方的に破棄した。この政府の措置に対しクラリン・グループは，憲法違反であるとして連邦裁判所に仮保全措置を求め，裁判所は原告を支持する判決を下した。しかしながら，2010年6月15日，政府の上告を受けての最高裁の判決は，下級審の判決を覆し，クリスティーナ政権の主張を全面的に認める内容だった。8月には，クラリン・グループと，同じく大手のラナシオン・グループの両グループが，過去において新聞の印刷を行う会社パペル・プレンサ社の株取得に動いた際，1976年からの軍事政権期における人権侵害への関与が疑われるとして，クリスティーナ政権は両グループを告訴した。この政治的圧力に対し，アメリカ国務省は，アルゼンチン国内の言論の自由に対し懸念を表明した（*Clarín*, 25 de agosto de 2010）。

2　労働組合への譲歩

政府と労働総同盟（CGT：Confederación General de Trabajo）との良好な関係は，さまざまな問題を抱えつつも，キルチネル前大統領とモジャーノ（Hugo Moyano）労働総同盟書記長との個人的なつながりもあって，2003年から維持されてきた。実際，2011年1月，モジャーノ書記長は，キルチネルの死去を受けて，次期大統領選挙にはクリスティーナ大統領が出馬することが望ましいと支持を表明した。ところが，絶え間ない労働組合側の賃上げ要求に対して，クリスティーナ大統領が批判的なコメントを出したところ，モジャーノが批判で応戦するなど，関係が徐々に悪化していった。賃上げ問題以外でも，農牧湾岸労働者連盟（UATRE: La Unión Argentina de Trabajadores Rurales y Estibadores）の書記長が，政府の補助金申請において不正を行ったとして逮捕されたこと[(3)]に対して，モジャーノ労働総同盟書記長は，逮捕された書記長の即時釈放をクリスティーナ大統領に訴え，この逮捕の背景には政府の関与が見られるとして，労組への介入を批判する出来事もあった（*La Nación*, 11 de febrero de 2011）。最終的には，モジャーノ書記長を中心とした労組側の圧力もあってか，農牧湾岸労働者連盟の書記長は事情聴取を受けただけで保釈された。

徐々に労組との関係が悪化する中，モジャー書記長本人に対するマネーロンダリング疑惑が発覚した。マネーロンダリングを調査しているスイスの検事が，モジャーノの関与を確認するためアルゼンチンの司法当局に協力依頼をしたところ，彼は一連の捜査の背景には政府がいると痛烈に批判した（*La Nación*, 3 de marzo de 2011）。

結局，大統領選挙における労組の動員力を軽視できないとクリスティーナ政権は判断し，選挙前に譲歩するしかなかった。2011年3月には，労組側から要求された賃上げにおいて，モジャーノ書記長のお膝元であるトラック業界労組（FEDCAM: Federación Nacional de Trabajadores Camioneros, Obreros y Empreados del Transporte Automotor de Cargas, Logística y Servisios）[(4)]への

24％の賃上げを認めた。予備選挙直前には，政労使3者による最低賃金を協議する審議会において，25％の引き上げで合意に至った（*La Nación*, 31 de marzo de 2011）。

3　地方選挙

10月の大統領・連邦議会議員選挙に先立って実施される州知事選挙などの地方選挙[5]は，国政選挙の趨勢を直接決定づけるものではないが，大統領および与党に対する有権者の評価を垣間見ることができる。ましてや，今回の大統領選挙では，8月に大統領選挙および連邦議会議員選挙の候補者を選出する予備選挙が初めて実施されることとなり，事実上，予備選挙までの地方選挙が大統領選挙の行方を占う上で注目された。

選挙年である2011年の幕開けとなったのは，内陸部の小州であるカタマルカ州知事選挙であった。2009年の州議会議員選挙では，コンセルタシオンを形成するキルチネル派とコボス副大統領派が，初めて選挙の場で対立したということで，高い関心を呼んだ。実際，キルチネル派の敗北を受けて，2009年中間選挙の日程が前倒しになり，連邦政府の上下両院議員選挙でも，両院で過半数割れとなる敗北を決しただけに，今回も注目を浴びた。そのキルチネル派とコボス副大統領派という構図は今回の州知事選挙でも同じであった。

3月13日に実施された州知事選挙では，コボス副大統領に近く，3選を目指したブリスエラ（Eduardo Brizuela del Moral）候補とキルチネル派のコルパッチ（Lucía Corpacci）候補の一騎打ちとなった。結果は，予想に反してコルパッチ候補（49.5％）がブリスエラ候補（45.6％）に勝利した。ただし，2009年の選挙同様，今回の選挙では，有権者が8年にわたるブリスエラ州知事の運営に飽きが生じたという州独自の要因が強く，コルパッチの勝利が，クリスティーナ大統領への支持へと直結するものではないとの見方が強かった。とはいえ，大統領選挙に向けての好材料は，2009年選挙では，ペロニスタ党が分裂したのに対し，今回は，州知事選挙候補者を選出するために党が独自に行った予備選挙を経て，候補者を一本化できたことであった。実際，2009年でのペロニスタ党系候補者の得票率を合算すると，今回の得票率とほぼ同じであった。

このようにカタマルカ州知事選挙では，ペロニスタ党統一候補の擁立に成功し，現職を破った選挙となったが，3月20日に行われたチュブット州知事選挙は違った展開を見せた。ペロニスタ党のキルチネル派と反キルチネル派候補の選挙戦となったチュブット州知事選挙は，反キルチネル派のブッシ（Martín Buzzi）候補が0.15ポイントという僅差で勝利した。現職の州知事は，ペロニスタ党反キルチネル派の重鎮で，全面的にブッシ候補を推したが，それでも薄氷の勝利だった。選挙後，敗北したキルチネル派は，選挙での不正を告発し，州最高裁判所は不正の疑いのある投票場で再投票の命令を下した。裁判所の命令に従い，5月29日に再投票が行われ，またもや僅差ながら，反キルチネル派のブッシ候補の勝利が確定した。

チュブット州知事選挙は，キルチネル派の敗北に終わったが，全体的には，カタマルカ州知事選挙のようにキルチネル派勝利が続いた。サルタ州知事選挙（4月10日），ラリオハ州知事選挙（5月29日），ネウケン州知事選挙（6月12日），ミシオネス州知事（6月26日）と連勝し，ティエラデルフエゴ州知事選挙（6月26日，決選投票7月3日）では，得票率60％を超えるような圧勝であった。ただし，これらの勝利はあくまでも小さな州[6]での傾向であり，大きな州では，2007年と2009年選挙同様，苦戦を強いられた。

全国で2番目の有権者数をほこるブエノスアイレス市[7]で市長選挙が，7月10日に行われた。現職で反キルチネル派重鎮であるマクリ（Mauricio Macri）候補（46.1%）は，キルチネル派のフィルムス（Daniel Filmus）候補（元教育相，27.3%）に20ポイント近い大差をつけた。ただし，マクリ候補は当選に必要な条件である得票率50%を満たすことができず，結果は決選投票に持ち込まれた。同月31日，決選投票が行われ，マクリ候補（64.3%）がフィルム候補（35.8%）に勝利し，再選を果たした。

7月24日には，全国で3番目の有権者数を有するサンタフェ州で知事選挙が行われた。同州は，他州と違い社会党（Partido Socialista）勢力が強く，2007年州知事選挙では，初めて社会党州知事が誕生した選挙区であった。結果は，その社会党のビネル（Hermes Binner）州知事が支持したボンファッティ（Antonio Bonfatti）候補（39.7%）が，マクリ・ブエノスアイレス市長の推すトレス（Miguel Torres Del Sel, 36%）を破った。キルチネル派重鎮のロッシ（Augustín Rossi, 22.8%）は，反キルチネル派候補2名に敗れ3位に終わった。

8月に入り，予備選挙直前に行われた有権者数4位のコルドバ州でも州知事選挙が実施された。コルドバ州では事情が前述の2選挙区と異なり，キルチネル派は候補者を擁立せず，他の候補者と比較してより好ましい候補者であるとして，デラソタ・ペロニスタ党候補（元州知事，José Manuel de la Sota）を間接的に支持する戦略をとった。結果は，デラソタ候補（42.6%）が，3度目の当選を果たした[8]。

4　政治勢力の動向

ここで一度，大統領選挙に向けた主要各政治勢力の動きをまとめてみたい。

キルチネル前大統領やクリスティーナ大統領が所属するペロニスタ党だが，2003年以降，キルチネルが政党横断型政党勢力コンセルタシオンを構築する過程で，キルチネル派と反キルチネル派とに分裂した状態が継続している。

まず，そのキルチネル派だが，当初，キルチネル前大統領が候補者と目されていた。ところが，2010年10月27日，彼は心不全を発症し急死した。この突然の死は，2011年大統領選挙に向けた動きにおいて，もっとも大きな衝撃を与えた。それは，キルチネル派の大統領候補として，キルチネル前大統領は半ば自明となっていただけに，新たな候補者の選定を求められたからに他ならなかった。当初のキルチネルの戦略は，憲法の規定により，大統領職は連続再選しか認められていないことから，自分が2003年からの4年間の大統領職を務めた後，再選を試みず，あえてクリスティーナを挟む。そして2011年大統領選挙には自らが出馬し，2015年大統領選挙での再選の可能性を残すことであった。ところが，そのキルチネルの死去により，そのシナリオは完全に崩れ，その後の議論は，クリスティーナ大統領の出馬に一気に傾いた。これは，たとえ2011年大統領選挙で彼女が勝利したとしても，2015年大統領選挙では，現憲法下では出馬できないことを意味したが，クリスティーナ以外に適任者はいなかったという状況にあった。

2010年12月には，ペロニスタ党執行部会合が大統領官邸で開催され，執行部役員ほか，有力議員および州知事，市長といったキルチネル派の要人が集まった。ペロニスタ党は，キルチネル党首のもと党再建を目指していたが，ほとんど何も着手することなく彼が死去したことから，権力の空白期間が続いていた。制度上，ブエノスアイレス州知事を務めるシオリ（Daniel Scioli）第一副党首が，

党首代行となったが，党内をまとめることができずにいた。かといってクリスティーナ大統領が，キルチネルの代役を務めることもできなかった。

そうした中での今回の会合の目的は，今後の方針の確認もさることながら，キルチネル派の団結を確認するものであった。会合の場で，クリスティーナ大統領は，大統領選挙への出馬を明言することはなかったが，出席者からは候補者として適任であるとの発言が相次いだ。2011年1月，シオリ党首代行が，クリスティーナの出馬に対して支持を表明したことがきっかけとなり，キルチネル派内部では，彼女の出馬はもはや自明のものとされるようになった。

次々と党内の指導者から支持表明がなされたものの，クリスティーナの出馬が正式に決定したのは，5月になってからであった。19日，党執行部会合が行われ，クリスティーナ大統領の出馬を支持する声明文が採択された。28日には，党の最高意思決定機関である党大会が開催され，彼女の出馬の可否を問う採択が行われ，全会一致で可決された。6月21日，クリスティーナ大統領は満を持して，キルチネル前大統領からのキルチネル派政権の業績を全面的に押し出して，大統領選挙への出馬を表明し，すぐさまブドゥー（Amado Boudou）経済相を副大統領候補に指名した。登録政党・選挙同盟の名前は，ペロニスタ党ではなく2003年大統領選挙から使用している「勝利のための戦線（Frente para la Victoria）」であった。

他方，反キルチネル勢力は，分裂して選挙に挑むことになった。キルチネル派対抗勢力の統一候補の擁立を模索する動きはあったが，失敗に終わったのである。

反キルチネル派の動向をみると，ペロニスタ党反キルチネル勢力は2010年6月，大統領選挙に向けて統一候補を擁立する事前合意に至った。その中には，ドゥアルデ元大統領，アドルフォ・ロドリゲスサア（Adolfo Rodoríguez Saa）元暫定大統領，ソラ（Felipe Solá）下院議員（元ブエノスアイレス州知事），レウテマン（Carlos Reutemann）上院議員（元サンタフェ州知事），アルベルト・ロドリゲスサア（Alberto Rodoríguez Saa）サンルイス州知事といった党内重鎮の多くが含まれた。

8月になるとメンバー間での意見交換が活発となり，当初の目的は，党を超えた反キルチネル候補の擁立であった。手始めに党所属ではないが，国民の人気が高かったマクリ・ブエノスアイレス市長と交渉を始めたが具体的な成果を得ることはできなかった。メンバーのレウテマン上院議員は，国民の信頼が一番厚いことから常に有力な大統領候補の一人に名を連ねるが，早々と大統領選挙への出馬を否定した。それどころか，大統領選挙まで1年以上ある段階で，ペロニスタ党の反キルチネル勢力内部で早くも軋轢が生じ始め，党内での候補者一本化は危ぶまれた。もちろん，内部分裂における最大の利益者は，キルチネル派であるとの認識を十分共有していたのだが，各候補者の野心により，実現するのは非常に困難な状況だった。

2011年4月3日，ペロニスタ党反キルチネル派は独自の予備選挙を実施した。全国を統一区としてではなく，地域ごとに日程が組まれ，その最初の地区として，ブエノスアイレス市が対象となった。この予備選挙には，ドゥアルデ前大統領とアルベルト・ロドリゲスサア・サンルイス州知事の2名が出馬したが，問題が生じ揉めた。その後の予備選挙も事実上形骸化し，候補者を選出することはできず，その2名が独自の勢力を立ち上げ，分裂した状態で大統領選挙に挑むこととなった。

最大野党である急進党は，2010年6月，党公認候補の選定を本格化させた。キルチネル政権と事実

上決裂したコボス副大統領とリカルド・アルフォンシン（Ricardo Alfonsín）下院議員[9]の動向に注目が集まった。当初は4月に，大統領候補を選出するための党独自の予備選挙を実施する予定であったが，4月7日に党執行部会合が開かれ，アルフォンシン下院議員を大統領選挙の公認候補に決定した。アルフォンシン同様，出馬表明をしていたコボス副大統領と別の上院議員は，出馬を辞退することとなった。急進党以外では，サンタフェ州知事として人気の高いビネルや個人的カリスマ性で人気を博したカリオ（Elisa Carrió）が出馬を表明した。

5　予備選挙

キルチネル派は，前述したように大きな州では苦戦が続いたものの，小さな州では大きな番狂わせはなく選挙戦を有利に進めていた。そうした中の8月14日に，国政レベルでは初めて，大統領選挙および連邦議会議員選挙のための予備選挙（PASO，法律第26,571号/2009年12月14日，大統領令第586号/2011年5月11日）[10]が実施された。

この予備選挙は，アメリカが採用しているような，大統領選挙に際し党内に複数の候補者が存在する場合に，党の候補者を選出するための選挙ではない。もちろん，今回採用される予備選挙にその側面はあるのだが，たとえ政党および選挙同盟内で一人しか候補者がいない場合，例えば「勝利のための戦線」のクリスティーナ候補さえも，その対象となる選挙である。そして，予備選挙に登録し出馬しない候補者は，10月の大統領選挙に参加できないと規定されている。その他，予備選挙以後に大統領選挙の候補者登録ができないことから，反クリスティーナ勢力が再度結集するのを阻止する効果もあったと言える。実際に，予備選挙の候補者登録は，6月25日であり，大統領選挙本番の4か月前には候補者を決定する必要があった。

予備選挙の正式名称が，「開かれた，同時の義務予備選挙」となっていることから，投票資格者は，党員だけでなく全ての有権者を対象とした「開かれた」もので，日程を同一日に定めた「同時の」，そして投票が「義務」となる予備選挙であった。複数の候補者が存在する政党および選挙同盟では，最多得票者が候補者として選出される。1.5%の得票率を獲得できなかった政党および選挙同盟は，複数の候補者がいる場合にはその合算が目安となるが，10月の選挙に参加することはできないという内容であった。

表1　2011年予備選挙の結果

候補者名（登録政党および同盟名）	得票率（%）
クリスティーナ・キルチネル（勝利のための戦線）	50.21
リカルド・アルフォンシン（社会開発のための連合）	12.20
エドゥアルド・ドゥアルデ（民衆戦線）	12.12
エルメス・ビネル（革新派拡大戦線）	10.18
アルベルト・ロドリゲスサア（連邦戦線）	8.17
エリサ・カリオ（市民連合）	3.22
ホルヘ・アルタミラ（左派戦線）	2.46
その他	1.44

（出所）内務省（http://www.elecciones.gov.ar/estadistica/resultados_nacionales_2011.htm 2011年2月1日アクセス）。

表２　2011 年予備選挙における選挙区別得票率

選挙区	最多得票候補者名	得票率（%）	有権者全体に占める有権者数の割合（%）
ブエノスアイレス州	クリスティーナ・キルチネル	53.35	37.3
ブエノスアイレス市	クリスティーナ・キルチネル	30.17	10.3
サンタフェ州	クリスティーナ・キルチネル	37.91	8.8
コルドバ州	クリスティーナ・キルチネル	34.25	8.8
メンドサ州	クリスティーナ・キルチネル	46.94	4.2
トゥクマン州	クリスティーナ・キルチネル	65.15	3.4
エントレリオス州	クリスティーナ・キルチネル	45.85	3.2
サルタ州	クリスティーナ・キルチネル	62.68	2.6
チャコ州	クリスティーナ・キルチネル	60.35	2.5
コリエンテス州	クリスティーナ・キルチネル	63.42	2.4
ミシオネス州	クリスティーナ・キルチネル	64.10	2.3
サンチアゴデルエステロ州	クリスティーナ・キルチネル	80.45	2.0
サンフアン州	クリスティーナ・キルチネル	65.26	1.6
フフイ州	クリスティーナ・キルチネル	58.01	1.4
リオネグロ州	クリスティーナ・キルチネル	60.08	1.4
フォルモッサ州	クリスティーナ・キルチネル	70.08	1.2
ネウケン州	クリスティーナ・キルチネル	55.31	1.2
チュブット州	クリスティーナ・キルチネル	51.56	1.2
サンルイス州	アルベルト・ロドリゲスサア	53.33	1.0
ラパンパ州	クリスティーナ・キルチネル	47.93	0.9
カタマルカ州	クリスティーナ・キルチネル	63.43	0.8
ラリオハ州	クリスティーナ・キルチネル	50.52	0.7
サンタクルス州	クリスティーナ・キルチネル	65.54	0.5
ティエラデルフエゴ州	クリスティーナ・キルチネル	61.66	0.3

（出所）内務省（www.ministerio.gov.ar 2011 年 2 月 1 日アクセス）。
「有権者数の割合は」、Centro de Estudios Nueva Mayoría(http://www.nuevamayoria.com/ES/ 2003 年 8 月 25 日アクセス）の資料をもとに作成。
（注）　上位 4 選挙区が都市部に該当する。

このように候補者を決定している場合も予備選挙の対象とするなど，事実上の「大統領選挙前の大統領選挙」と位置づけられ，2 カ月後の本番に迎えて，非常に大きな意味合いを持った。

結果はクリスティーナ候補の圧勝だった。クリスティーナ候補は，開票が進んだ投票日夜に勝利宣言を行い，今回の勝利の要因を，2003 年から続く夫キルチネルと自分とによるキルチネル派政権によるものであることを強調した。確かにキルチネル派政権への評価もあったが，キルチネル前大統領の死去による同情票を指摘する声もあったほか，何よりも対立候補の分裂が勝利の主因となった。他方，その分裂した対立候補の結果は厳しいものであった。予想ほど票が伸びなかったアルフォンシン急進党候補（登録名は，「社会開発のための連合」［Unión para el Desarrollo Social］）は，票の伸び悩みを素直に認め，今後の挽回を約束した（*La Nación*, 15 de agosto de 2011）。また，対立

表3　2011年大統領選挙の結果

候補者名（登録政党および同盟名）	得票率（%）	予備選挙との差
クリスティーナ・キルチネル（勝利のための戦線）	54.11	3.90
エルメス・ビネル（革新派拡大戦線）	16.80	6.62
リカルド・アルフォンシン（社会開発のための連合）	11.10	−1.10
アルベルト・ロドリゲスサア（連邦戦線）	7.96	−0.21
エドゥアルド・ドゥアルデ（民衆戦線）	5.86	−6.26
ホルヘ・アルタミラ（左派戦線）	2.30	−0.16
エリサ・カリオ（市民連合）	1.82	−1.40
その他	0.05	

（出所）Cámara Nacional Electoral（http://www.pjn.gov.ar 2011年2月1日アクセス）。

候補陣営からは，選挙で不正が見られたと非難する声が上がったが，政府は全面的に否定したほか，大々的に報道したクラリン紙とラナシオン紙を痛烈に批判するなど，マスコミへの対応は一貫して厳しかった。また，得票率1.5%以下の候補者に3名が該当し，10月の大統領選挙には出馬できなくなった。

選挙区別の投票結果を見た場合，クリスティーナ候補は，サンルイス州を除くすべての選挙区で勝利した。そのサンルイス州では，州知事であるアルベルト・ロドリゲスサア候補が勝利した。2007年中間選挙では多くの票を失った大きな州，例えば，ブエノスアイレス州，ブエノスアイレス市，コルドバ州，サンタフェ州では，票を伸ばした。地元サンタクルス州においては，2009年中間選挙では敗北したが，今回は勝利した。

クリスティーナ候補の勝利に終わった予備選挙を受けて，大統領選挙の焦点は，10月の選挙本番まで2カ月近くしか残されていないことから，誰が勝利するかではなく，同候補の勝利はすでに織りこみ済みとなり，最初の投票で勝利するか，決選投票まで持ち越されるか[11]に移った。

Ⅱ　大統領選挙の結果

大統領選挙の結果は，クリスティーナ候補が予備選挙以上に圧勝した。それにしても今回の大統領選挙ほど，盛り上がりにかけるものはなかったと言えよう。その理由は，今回初めて導入された予備選挙で，彼女の圧勝が予想され，直前の世論調査の結果でもその傾向に変化がなかったからであった。

クリスティーナ候補は，予備選挙より票を上乗せして，焦点となっていた1回目の投票で勝利した。大統領職の再選は，1983年民政移管後においては，1995年のメネム（Carlos Saúl Menem）大統領に次ぐ2例目であるが，再選に際する投票率は，1995年の事例を上回るものであった。1995年においては，最大野党の急進党が支持を失い，新興中道左派勢力の伸長によって野党勢力の二分化が見られたが，今回は，それ以上に分極化した結果が，得票率に表れた。

投票結果の第2位は，予備選挙では4位に終わった社会党のビネル候補であった。急進党を軸とする社会開発のための連合のアルフォンシン候補は第3位，2つに分裂したペロニスタ党反キルチネル派候補のアルベルト・ロドリゲスサア候補と

表４　2011 年大統領選挙における選挙区別得票率

選挙区	最多得票候補者名	得票率（%）	有権者全体に占める有権者数の割合（%）
ブエノスアイレス州	クリスティーナ・キルチネル	45.91	37.3
ブエノスアイレス市	クリスティーナ・キルチネル	35.11	10.3
サンタフェ州	クリスティーナ・キルチネル	41.96	8.8
コルドバ州	クリスティーナ・キルチネル	37.29	8.8
メンドサ州	クリスティーナ・キルチネル	51.12	4.2
トゥクマン州	クリスティーナ・キルチネル	65.19	3.4
エントレリオス州	クリスティーナ・キルチネル	54.63	3.2
サルタ州	クリスティーナ・キルチネル	64.55	2.6
チャコ州	クリスティーナ・キルチネル	65.24	2.5
コリエンテス州	クリスティーナ・キルチネル	68.04	2.4
ミシオネス州	クリスティーナ・キルチネル	67.08	2.3
サンチアゴデルエステロ州	クリスティーナ・キルチネル	82.11	2.0
サンフアン州	クリスティーナ・キルチネル	65.41	1.6
フフイ州	クリスティーナ・キルチネル	64.43	1.4
リオネグロ州	クリスティーナ・キルチネル	68.07	1.4
フォルモッサ州	クリスティーナ・キルチネル	79.24	1.2
ネウケン州	クリスティーナ・キルチネル	61.13	1.2
チュブット州	クリスティーナ・キルチネル	59.82	1.2
サンルイス州	アルベルト・ロドリゲスサア	51.50	1.0
ラパンパ州	クリスティーナ・キルチネル	58.29	0.9
カタマルカ州	クリスティーナ・キルチネル	69.79	0.8
ラリオハ州	クリスティーナ・キルチネル	51.28	0.7
サンタクルス州	クリスティーナ・キルチネル	74.89	0.5
ティエラデルフエゴ州	クリスティーナ・キルチネル	68.43	0.3

（出所）内務省（www.ministerio.gov.ar 2011 年 4 月 1 日アクセス）。
「有権者数の割合は」、Centro de Estudios Nueva Mayoría（http://www.nuevamayoria.com/ES/　2003 年 8 月 25 日アクセス）の資料を基に作成。
（注）　上位 4 選挙区が都市部に該当する。

ドゥアルデ候補はそれぞれ 4，5 位に沈んだ。とりわけドゥアルデ候補の得票率は，予備選挙と比較して，6 ポイント以上も減少しており，予備選挙で投じられたドゥアルデ候補への票が，同じペロニスタ党に所属するクリスティーナ候補に流れたと見られる。

大統領選挙の結果を政党別にみると，ペロニスタ党は，党内で意見の対立はあるものの，クリスティーナ候補，アルベルト・ロドリゲスサア候補，ドゥアルデ候補の得票率を合わせて 71％で，2007 年選挙とほぼ同じ数字を出している。他方，最大野党の急進党は，前回は候補者を擁立できなかったが，今回は 10％を超えた。そうした中，サンタフェ州知事であり社会党のビネル候補の躍進は目にみはるものがある。党として支持を得ているというよりは，ビネル個人への評価による数字だと思われるので，今後はいかに個人に依拠しない安定した党の体制を全国で整えるのかが課題

となるだろう。

一連の州知事選挙では，サンタフェ州，サンルイス州で反キルチネル勢力が勝利した。それ以外の6州の選挙区では，キルチネル派が勝利を収めた。結果，2011年に選挙が実施されなかったキルチネル派州知事の2つの州[12]を含めると，24のうち，21州の州知事がキルチネル派となった。

連邦議会の上下両院議員選挙は，上院議員の3分の1，下院議員の半数が改選された。大統領選挙でのクリスティーナの圧勝からわかるように，キルチネル派は多くの議席を獲得し，2009年の中間選挙で失った過半数を奪還した。非改選議席数と合わせて，定数72の上院では38議席，定数257の下院では133議席となっている[13]。

Ⅲ　第2次クリスティーナ政権の特徴

2011年12月10日，大統領就任式が行われ，第2次クリスティーナ政権が始まった。就任演説において，クリスティーナ大統領は，2003年以降の政権での経済・社会分野における成果を強調した。とりわけ，2001年経済危機の最悪期から脱し，失業率，貧困率を改善させ，雇用創出および最低賃金の引き上げを実施するなど社会環境が改善されたと指摘した。また，懸案となっていた労働組合との関係では，例えばストライキ権は憲法上保障されたものには違いないが，恐喝するためのものでないとし，地元サンタクルス州で問題となっている教職員労組や石油労組の強硬的な対応を批判した。この発言は，モジャーノ労働総同盟に対する牽制を暗示させるものとのみられた。

新閣僚の顔ぶれについては，変化よりも継続を求めたものであった。交代のあった3ポストは，それぞれ前任者が選挙に出馬したことによるものであり，かつ後任者はもともと同じ機関の高官を務めていた経験から，閣僚人事によって何らかの政策転換が行われることはなかった。具体的には，首相には，クリスティーナ大統領の信頼の厚いアバル・メディナ（Juan Manuel Abal Medina）前首相府報道長官，経済相には，ロレンシノ（Hérnan Lorencino）前経済省金融長官，農牧・漁業相にジャウアル（Norberto Yahuar）前漁業長官が就任した。この3ポストの人事以外での継続性を顕著に見出すことができるのは，公共事業を管轄する連邦企画相のデビド（Julio De Vido），大統領府法務長官のサニーニ（Carlos Zanini）の留任である。この両者は，2003年キルチネル政権発足時からのメンバーで，一貫して同じポストに留まっているほど，高い信頼を得ている人物である。

このように就任演説，閣僚の顔ぶれ，そして2012年3月1日に通常国会の開会に合わせて行われた一般教書演説からみても，2期目の路線は継続という一言でまとめられよう。そうした中，とりわけ「内向き」政策として国際社会の注目を喚起しているのが，フォークランド諸島領有権問題に絡むイギリスとの外交的軋轢である。

2012年4月2日に，フォークランド（スペイン語名：マルビナス）紛争勃発30周年を迎えるにあたり，クリスティーナ政権は同諸島領有権問題を外交政策の重要課題としている。この領有権問題は，2003年のキルチネル政権期から取り組んできたが，ここにきて具体的な対応をとるなど，積極性が増している。

2010年5月にブエノスアイレスで開催された南米諸国連合（UNASUR: Unión de Naciones Suramericanas）の首脳会合において，アルゼンチンの領土であるという主張への正当性が確認され，現在領有権を有するイギリスに対して二国間の交渉再開を求める表明がなされた。イギリス系

企業が，フォークランド諸島沖合に油田を発見した可能性があると発表した際，現政権はイギリス企業の活動は非合法であり，かつ国連決議違反であると批判した。

その後，国際会議，地域会議，さらには二国間会談において，つねにクリスティーナ政権はフォークランド領有権問題を取り上げてきた。2011年12月20日，メルコスール首脳会合において，加盟国および準加盟国はフォークランド諸島船籍の域内入港を拒否するとした声明文を採択した。実際，2011年12月18日には，ウルグアイからフォークランド諸島に向かっていたスペイン国籍漁船が，アルゼンチンの水上警察船に停止命令を出され，追跡された。

一連のクリスティーナ政権の外交政策に対して，イギリス政府は，フォークランド諸島民の自決権を尊重するとの従来の見解を繰り返し表明した。キャメロン（David Cameron）首相は，2012年1月18日に，アルゼンチン政府の要求は，島民の意思に反するものであり，植民地主義的であると批判した。この植民地主義発言に対して，大統領はじめ，閣僚が猛反発した。

アルゼンチンとイギリス政府間で舌戦が行われる中の1月31日，イギリスのウィリアム王子が，イギリス軍の通常任務としてフォークランド諸島に着任した。これに対して，クリスティーナ政権は即座に，イギリス政府は，二国間の交渉を通じて平和的な解決を望まず，領土問題を軍事化していると反発した。

2月7日，大統領は演説を行い，英国の軍事化を非難し，国連で問題提起を行うと発表したほか，アルゼンチン政府の立場をラテンアメリカ諸国が支持していると述べた。その後，上下両院の外交委員会が，フォークランド諸島に近いティエラデルフエゴ州ウシュアイア市において開催され，これまでのアルゼンチンの主張を確認したウシュアイア宣言を採択し，あくまでも交渉を通じての問題解決を訴えた。

その一方で，強硬手段に訴える動きも見られる。現政権は同諸島とラテンアメリカを唯一結ぶチリとの空路において，アルゼンチン領空通過を禁止するとしたり，労組がイギリス国籍の船舶や航空機に関連する作業を中断したり，ティエラデルフエゴ州政府がイギリスのクルーズ船2艘の入港を拒否した。ついにはジョルジ（Débora Giorgi）産業相が国内の企業に対してイギリス製品の輸入を自主的に控えるよう要請した。

フォークランド領有権問題が，今後どのように展開するのかは別としても，第2次クリスティーナ政権における懸案事項がすでに浮上している。例えば労組との関係では，モジャーノ労働総同盟書記長は，政権に対する対立姿勢を強めている。クリスティーナ大統領が「ストライキは労働者の権利ではあるが，恐喝のための道具ではない」と就任に際して行った発言にすぐさま反発し，ペロニスタ党役職の辞任を表明した。教職員労組との賃上げ問題も解決にてこずり，授業が通常通り開始されない事態に陥った。

治安悪化や社会サービスの不備などで市民の不満は増大している中，2012年2月22日，アルゼンチン史上最多の犠牲者を出した鉄道事故が起きた。ブエノスアイレス市内を通る鉄道サルミエント線終着駅オンセ駅にて，入ってきた列車のブレーキが利かず，車両止めに衝突し，死者51名，負傷者700名以上という大惨事が起きた。原因は，人為的ミスであるとか，ブレーキに不具合が生じたとか，まだ解明されていないが，少なくとも市民に大きな衝撃を与えた。

経済問題では，経済過程に対する国家の関与が強まっている。外国資本の石油会社に対するコン

セッション契約破棄・国有化問題，中央銀行の独立性を脅かす定款改正，輸入規制措置等，国際社会が懸念を表明するような政策が実施されている。たとえば，石油会社に対するコンセッション契約破棄問題は，2012年1月にクリスティーナ政権がガソリン価格において，外資系石油会社大手5社にカルテルが存在すると批判したことに端を発する。後に，政府高官による聞き取り調査を受けて，現政権は，石油会社側からカルテルの存在を認める発言があったと発表されたが，直後に石油会社より否定する声明が出されるなど意見の相違がみられた。クリスティーナ大統領に至っては，石油会社の生産量が不十分であることから，燃料輸入が貿易収支を圧迫していること，アルゼンチン政府の補助金がありながら，それに則した設備投資が行われていないと批判した。その後，石油が生産される州においては，一方的にコンセッション契約を破棄する決定が相次いでいる。ついには，4月16日，クリスティーナ大統領は，スペイン石油大手レプソル傘下のアルゼンチン最大の石油会社YPFの株式51%を取得し，YPFの経営権を取得する方針を明らかにし，関連法案を議会に提出した。スペインをはじめ，EU，米国，世界銀行等の反発がある中，法制化が確実視されていることから，その後の展開は注目される。

政策以外の問題では，ブドゥー副大統領がらみの汚職疑惑が早くも浮上しており，裁判の行方次第では，クリスティーナ政権の痛手になることは間違いない。

おわりに

2011年大統領選挙は，対立勢力の分裂を主因として，キルチネル前大統領の急死による同情票もあって，クリスティーナ大統領は圧勝し再選された。上下両院においては過半数を奪回し，州知事選挙ではキルチネル派が多く当選した。ただし，政治戦略などあらゆる面で中心的存在であったキルチネル前大統領なき後のクリスティーナ政権は，どのような方針のもと政権運営を行っていくのは不確かである。とりわけ，キルチネル派を象徴していた政党横断型政治勢力コンセルタシオンが崩壊した今，どのような政権基盤を構築するのか，その際，反キルチネル派を抑えてペロニスタ党中心でいくのか，その他の勢力との協力を模索するのか目が離せない。また，政策面では国内最大手の石油会社YPFの国有化問題やフォークランド領有権問題など「内向き」傾向がうかがえる。

2015年大統領選挙に目を転じるのは，あまりにも早計に失するが，現憲法下においては，連続3選が禁止されているため彼女は出馬できない。これを踏まえてか，側近の中には，大統領職の連続3選を認めるため，憲法改正の必要性を明言するものも現れた。個人的な見解としながらもブドゥー副大統領は，憲法改正を示唆する発言を行っている。そのような憶測はともかく，アルゼンチン政治は，キルチネル前大統領のいないクリスティーナ政権がどのように政権を維持し，政策を実施するのか，その中で彼女がどのような舵取りをするのかが注目される。

注

(1) 2003年以降，ペロニスタ党はキルチネル派と反キルチネル派とに事実上分裂している。2003年からの大統領選挙において，ペロニスタ党は党として公認候補を擁立しておらず，キルチネルおよびクリスティーナ両大統領とも，党内自派で固めた「勝利ための戦線（Frente para la Victoria）」から大統領選挙に出馬している。ただし，本稿では，キルチネルがペロニスタ党の党首を務めていた経緯もあることから，所属政党はペロニスタ党とし，両政権をペロニスタ党政権と位置づける。

(2) 詳細は，篠﨑（[2008]，[2010]）を参照されたい。

(3) この書記長は，大統領選挙で反キルチネル派候補であるドゥアルデ前大統領に近い人物であることから，大統領選挙に向けた政治的操作にほかならないとの批判が噴出した。
(4) モジャーノ労働総同盟書記長は，トラック業界労組の書記長でもある。
(5) ここでの地方選挙では，州知事選挙以外にも，州議会議員選挙，市町村首長選挙も含まれる。ただし，本稿では，もっとも政治的影響力のある州知事選挙に限定して言及する。
(6) 各選挙区の有権者の割合は，表2を参照されたい。
(7) ブエノスアイレス市（ブエノスアイレス自治市：Ciudad Autónoma de Buenos Aires）は，行政単位としては州同様の位置づけである。
(8) 8月の予備選挙と10月の大統領選挙の間に，トゥクマン州，チャコ州およびリオネグロ州で州知事選挙が実施され，キルチネル派候補が3州全てで勝利した。
(9) ラウル・アルフォンシン元大統領（Raúl Alfonsín, 1983～89年）の息子で，党ブエノスアイレス州支部代表を務める党内有力者である。
(10) 法律第26.571には，予備選挙以外にも，企業献金および映像メディアでの個人選挙キャンペーンの禁止，世論調査の公表制限を定めている。
(11) 大統領選挙での1回目投票の当選条件は，得票率50%以上，もしくは得票率45%以上かつ第2位の候補者との得票率の差が10ポイント以上となっている。かかる条件が満たされなかった場合，上位2候補者による決選投票が実施され，最多得票者が当選となる。
(12) サンチエゴデルエステロ州とコリエンテス州は，2013年に州知事選挙が予定されている。
(13) 勢力別の議席数については，主要紙・研究機関によって数字は異なるなど，確定したものはない。そうした中，一致していることは，上下両院ともにキルチネル派が過半数を獲得したということである。また，ここでいうキルチネル派とは，勝利のための戦線所属の議員だけでなく，協力関係にある議員も含まれている。

参考文献

篠﨑英樹 [2008]「アルゼンチンにおける二つのキルチネル政権の政治戦略」（『ラテンアメリカ・レポート』Vol.25 No.2 2-15ページ）
―――[2010]「2009年アルゼンチン中間選挙―ポスト・キルチネルに向けて―」（『ラテンアメリカ・レポート』Vol.27 No.1 46-56ページ）
新聞（電子版）
Clarín（http://www.clarin.com/）
La Nación（http://www.lanacion.com.ar/）

（しのざき・ひでき／慶應義塾大学非常勤講師）